フランスと私　フランスにて。

パリ支部長　原田哲男

新潟フランス協会の季刊誌ボンジュールに、「フランスと私」というテーマで寄稿して欲しいというお願いが届きましたので、フランスに来て50年になりますので、一つの区切りとして思い出話を書いてみよういう気持ちになりました。

50年になりますと書きましたが、1973年2月に渡仏をして彫刻家になりたいと言うことでヨーロッパのどの国が自分に一番合っているかどうかという事でヨーロッパの国を見てまわりました。フランスに来る前は上越市、高田工業高校で美術の教師をしていました。教師の仕事は好きでしたが、彫刻家になりたいと言う事で満足できなかったと言う事と、組合が毎日のように勧誘に来て、嫌になりました。

ドイツ、フランス、ベルギー、スイス、スペイン、イタリー等など、それぞれの国の美術館廻りをしました。これらの国全てに興味がありました。ドイツにまずは興味を持ちましたが、滞在許可証をもらうには学生証を取らなければなりませんでした。それには1年間の学費を払わなければならないと言われました。1年間の学費を持ち合わせていない私は、持ち合わせのお金と見比べてみたら、フランスは三ヶ月の学費で六ヶ月の滞在許可書がもらえると言う事を知りました。最初は旅行ビザ、六ヶ月後はパリ美術学校「パリボザール」に登録して、彫刻のアトリエに入れさせてもらいました。パリでの生活は楽ではありませんでしたが、生活費は佐渡の版画村の高橋さんが出発前に大きな作品を買ってくれた事で、半年ほど保証されていましたし、部屋代は両親が援助してくれましたから1年間は大丈夫だと言うことで、彫刻の事だけを考えて生活していました。

スタートはパリの画廊へ展示をしたり、サロンや展覧会に参加していました。そして、イタリアの大理石を彫ってみたいと言う事で大理石のアトリエが沢山集まっているカラーラと言う町に出掛けました。大理石の作品を彫っていたときにドイツの彫刻家が私の作品を見てドイツの彫刻シンポジュームに呼んでくれました。それと並行してパリのシャンゼリーゼ公園での展覧会の為、セメントの大きな作品を最初はパリ市の18区の夜の美術学校で制作し始めました。数個の部分が組み合わせられて一点の作品になるのですが、一人で動かせる大きさと言うことで、結構大きな作品になりました。

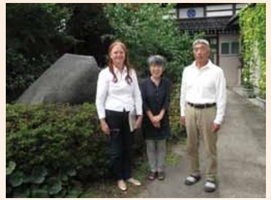
学校でのアトリエでは広い場所を使うので、皆んなに場所の取り過ぎだと言われアトリエから追い出されてしまいました。冬でしたからどうしようかと悩みました。そんな時友人がムードンのアトリエを紹介してくれました。アトリエといってもアトリエの庭の話で、寒い冬でセメントも固まってくれませんでした。この作品が出品されていたシャンゼリーゼ公園にアニーが見に来てくれました。これが彼女との最初の出会いです（1974年）。

その後はパリ美術学校に通い始めました、多摩美大卒業の同級生もいましたから居心地が良い事がわかりました。その後すぐドイツのシンポジュームに出かけました。彫刻家としてのスタートになりました。その時からアニーの理解、協力がありました。

アニーと出会った作品展

出会った頃のアニー

アニーと散歩


佐渡版画村発起人、高橋信一さんの息子さん、奥さん、アニー

「地球を縫う」アニーと一緒に

フランスと私　フランスのマンション 日本のマンション

寺尾　仁

フランスのマンションというと皆さん、どのようなイメージをお持ちですか。ナントやパリの街なかの建物を思い浮かべる方が多く、長い歴史をもつ石造り・レンガ造りの住宅を見ると、フランスと日本ではマンションと言ってもずいぶん違うと思っていることでしょう。

実は似ている点もけっこうあります。マンションを巡る法律の展開はその筆頭です。

高度経済成長に入る頃、日本でもフランスでもマンションという住宅がだんだんと使われるようになり、日本は区分所有法を1962年に制定しフランスの現行区分所有法は1965年に制定されました。日本でマンションが初めて建てられたのは1956年と言われているので、マンションが建ち始めるのを見て日本政府は急いで法律を定めたのでしょう。

マンションが数多く建ち始めて半世紀近く経つと、老朽化や荒廃が目立ってきます。日本では1995年に起きた阪神・淡路大震災で被災したマンションの処分にたいへん苦労したことをきっかけに、2002年に老朽化したマンションを建替えの促すマンション建替え円滑化法を定めます。フランスでは、1990年代から資金が足りなかったり手続きが面倒だったりして維持管理が行き届かないマンションに空室が増え犯罪に使われる事態に至ったので、2000年に荒廃したマンションを行政が取壊す制度を定めました。

マンションが荒廃するまで放っておいて取壊すと、持主や住民にだけでなく社会にとっても不都合が多いので、荒廃しないようにふだんから修繕・改良工事の実施を促すために、日本では2020年にマンション管理適正化法を改正し、フランスでは2014年に修繕計画や工事積立金を義務づけるよう法律を改正しました。

こうして見ると、フランスでも日本でもマンションが抱える問題は共通して広がっています。フランスと日本のマンションではもちろん違う点も多々あります。それはまた別の機会に紹介しましょう。

パリ郊外ラ・クールヌーヴ市のマンションの大規模修繕前後

フランスと私　フランスに暮らして

マロ白井　草

1992年の春、16才で初めてフランスへ渡りました。母と訪れたパリ、モンサンミッシェル、そしてナントは見るもの、出会う人、食事、すべてが今までとは違った世界でした。留学から就職、結婚、子育てと、いつの間にか30年が過ぎてしまいました。性格も育ちも純日本人の私がなぜ異国で長く暮すことができるのでしょう？当時バレエの勉強で渡仏しましたが、そもそもバレエ用語はフランス語なのでレッスンを受ける分には苦労しませんでした。30年前はまだフランスへバレエ留学する人は少なく、日本人は珍しがられ、とても親切にしていただきました。最初は、ヴァカンスが多く、夏時間は夜まで明るく時間の流れがとてもゆっくりで戸惑いました。今ではストライキやデモで、交通機関が止まったり学校が休みになることにも慣れました。フランス人は自国を誇りに思う一方で、個々の意見を尊重し、Nonということがおかしくなく、自由に意思表示ができる国です。それが私には合っていたのかもしれません。

帰国の度に母が通っている茶道のお稽古にお邪魔させていただき、茶の湯を知りました。日本に居た頃は全く興味がなかった日本文化でしたが、海外生活が長いからこそ日本の良さが分かり、今は日本の文化をもっと学びたいと思い始めました。幸い地元でも茶道教室があり、日本について色々と学んでいます。今度は私が日本とフランスの架け橋になり、日本文化をフランスに伝えられるよう今後も勉強を続けていきたいと思っています。

フランスと私　ナントで暮らしたい！

鈴木裕美

一足先に1996年にナントに渡り、新潟フェアーに参加した夫の鈴木正博（現副会長）に続き、白井理事のお声掛けの元、フランス協会に2003年4月に会員にさせて頂いてはや20年。思い出にふけるにはまだ早い現役である、というのは自身の勝手な思い込み。が、20年もお世話になってフランスにすでに7回も行かせていただき、そのうち5回もライフワークの茶席を持たせていただいたとは、資料を紐解いて驚き、今更ながら感謝の念に堪えない。

大学の専攻ではフランス文学を学んだが、茶道部専攻のように部室に入り浸っていた。卒業後名古屋から離れて新潟の地で、このようにフランスに復縁出来たのは、ご縁のお陰のみならず、草の根の人と人との関係を大切に育てはぐくまれ、ナント市、ナント大学との姉妹関係にまでむすびつけた新潟・フランス協会様のお陰であると、改めて申しておきたい。

2004年から始まったナント行きも、2006年、姉妹提携の2008年、2010年、新潟日報社ヨーロッパ拠点設置の2014年、2015年、パリ日本文化会館にも出向き市民会議の催された2018年と回を重ねた。

本間代表ご推薦のニースの風をほんの少しかがせていただき、マダム通りにあるホテルに宿を取っていただいて、マサハル　アオキのチョコレートの美しさにも魅了された。

どの回の渡仏も特徴深く思い出多いが、何より自然環境と人の温かさ、交通環境整った美しい街のナントに到着すると、思わず「ただいま」と言いたくなってからもうずいぶん経つ。老後一人残されたら、ナントで過ごしても良いと思うくらい身についた。機会があれば、かの地で借りた部屋をシェアーして、江戸千家の茶道教室でも開こうか、などと友人と妄想を膨らませたこともある。

ともあれ、日本文化をよく理解してくださるフランスと深いご縁が出来て幸せな老後？を送らせていただいている。パリではレストランで見知らぬ方に「日本人か？志賀直哉の暗夜行路は作者の経験が含まれているか？」と尋ねられて、自国の文化の不勉強さを恥じたのも懐かしい思い出である。

フランスと私　Impossible n'est pas français！ ～ギー先生の思い出～

坂本　明

東京・九段の小さな小学校で生まれて初めて接したフランス人は、口髭を蓄えた赤毛の男だった。小学生にとってはいささか強面で、日本語もあまりできず、いつも青いジャケットに水色のシャツ、茶色のネクタイ、グレーのぴちぴちのスラックスという格好のフランス語教師のギー・オルタ先生は、その「赤鬼」ぶりとは裏腹に意外と優しかった。いつも「Impossible n'est pas français.（フランス語に不可能という言葉はない）」というナポレオンの言葉を引用しながら、「キミタチモゼッタイニフランスゴウマクナリマス」とたどたどしい日本語で生徒を励まし、日本人にとっては難しいフランス語の発音を丁寧に根気よく直してくれた。もっとも毎週フランスの学校ではおなじみのdictée（書き取り試験）を行い、その上、間違えた単語をノートに20回も書かせたりした。そんなフランス語の授業を喜ぶ生徒などかなりの少数派で、中学で第1外国語を英語かフランス語を選択する段になると、級友の4人に3人はフランス語を捨てて英語を選択していった。

僕もかなりフランス語には辟易していたが、今更新しい言語に手をつけるのが億劫という消去的な理由でフランス語を選択した。中1、中2とフランス人が担任のクラスとなり、今まで通りなんとなくフランス語を続けていく。中高ではオリジナルの教科書を使っていたが、これが昭和初期に完成した代物で、プルーストの「失われた時を求めて」などが例文や文章題として載っている始末。当時の中高生にとっても古くさく難解で、すり切れるほど辞書を引き、四苦八苦してそれをこなした。おかげで大学も英語ではなくなんとかフランス語で受験することができた。その後もフランス語との付き合いは続き、社会人になってから、せっかく就職した会社を辞め、パリ第2大学の大学院へ留学した。大量のフランス語文献を読みこなしたり、指導教授から発音を褒められたり時は、ギー先生や中高の時代遅れの教科書も少しは役だったな、と思ったものだ。結果学位は無事取れたが、当初の目標であった国際機関で働く夢はかなわなかった。

ギー先生との再会は突然やってきた。仕事終わりにたまたま立ち寄った四谷三丁目の小さなフレンチレストラン「Pas à pas」で、青いジャケットに水色のシャツ、茶色のネクタイで口髭をたくわえた初老の白人が独りワインを飲んでいた。僕は迷わず声をかけた。30年ぶりに会った先生も、僕をおぼえていてくれた。授業中間違えた単語をノートに嫌そうに書いていて姿が印象的だったらしい。先生は日本語の名刺をくれた。「太田義」と刷ってあった。この方が日本人には分かり易いからと微笑んでいた。せっかくなので一緒に食事をさせていただいた。先生は僕がフランス語を話し、留学までしたことを心から喜んでくれた。今は小学校を辞め、四谷の大学でフランス語を教えたり、留学の斡旋をしたりしているらしかった。僕はフランス留学したものの、国連で働く夢は叶わなかったことを話した。そして勤め先を辞めて独立しようかどうか迷っているとも。「Impossible n'est pas français. Vous faites ce que vous voulez. Allez ! Bon courage !（フランス語に不可能という言葉はない、やりたいようにやりなさい、頑張れ!）」。ギー先生は30年前と変わらない言葉で僕の背中を押してくれた。こうして僕は自分でフランスと関わる仕事を創ろうと決意したのだ。